

2019 年度秋期

# 数の世界

(担当：角皆)

## 情報技術と数理の利用

コンピュータの発展・情報化社会の進展に伴い、

数理の解明とその利用が

ますます社会と密接になってきた

# 数理技術

## 情報技術と数理の利用

コンピュータの発展・情報化社会の進展に伴い、

数理の解明とその利用が

ますます社会と密接になってきた

# 数理技術

## 情報技術と数理の利用

物理技術（17世紀以来）:

基礎数理  $\implies$  物理現象  $\implies$  実用技術  
理論的 仕組み  
裏付け の構成

情報技術（20世紀以来）:

数理現象  $\implies$  数理技術  $\implies$  実用技術  
仕組み 物理的  
の構成 実現

数理の解明が直接に技術発展に繋がる

## 情報技術と数理の利用

物理技術（17世紀以来）:

基礎数理  $\implies$  物理現象  $\implies$  実用技術  
理論的 仕組み  
裏付け の構成

情報技術（20世紀以来）:

数理現象  $\implies$  数理技術  $\implies$  実用技術  
仕組み 物理的  
の構成 実現

数理の解明が直接に技術発展に繋がる

## 情報技術と数理の利用

物理技術（17世紀以来）:

基礎数理  $\implies$  物理現象  $\implies$  実用技術  
理論的 仕組み  
裏付け の構成

情報技術（20世紀以来）:

数理現象  $\implies$  数理技術  $\implies$  実用技術  
仕組み 物理的  
の構成 実現

数理の解明が直接に技術発展に繋がる

計算機で扱えるもの

計算機では本質的に

## 有限・離散

のものしか扱えない

- 無限・連続のものへの近似
- 有限・離散であることの積極的活用

計算機で扱えるもの

計算機では本質的に

## 有限・離散

のものしか扱えない

- 無限・連続のものへの近似
- 有限・離散であることの積極的活用



計算機で扱えるもの

計算機では本質的に

## 有限・離散

のものしか扱えない

- 無限・連続のものに近い
- 有限・離散であることの積極的活用

## 有限の算術（剰余系）

$m$  : 1 以上の整数を一つ取って固定

$m$  で割った余りのみに注目して計算する

$a$  と  $b$  とが  $m$  を法として合同  
(congruent modulo  $m$ )

$$a \equiv b \pmod{m}$$

$\Leftrightarrow$   $a$  と  $b$  とを  $m$  で割った余りが等しい

$\Leftrightarrow m \mid (a - b)$  ( $a - b$  が  $m$  で割切れる)

## 有限の算術（剰余系）

剰余のみに着目して

（剰余で分類した種類の間で）

（**well-defined** に）足し算・掛け算が出来る

足し算表は  
ほぼ当たり前  
右表は  $m = 5$

$$3 + 4 = 7 \equiv 2 \pmod{5}$$

+	0	1	2	3	4
0	0	1	2	3	4
1	1	2	3	4	0
2	2	3	4	0	1
3	3	4	0	1	2
4	4	0	1	2	3

## 実習：剰余系の掛け算

$m = 3, 4, 5, 6, 7$  について、

演習プリントの掛け算表を埋めてみよう

掛け算表は

当たり前？

右表は  $m = 5$

$$2 \times 3 = 6 \equiv 1 \pmod{5}$$

$\times$	0	1	2	3	4
0	0	0	0	0	0
1	0	1	2	3	4
2	0	2	4	1	3
3	0	3	1	4	2
4	0	4	3	2	1

(演習プリントの表には 0 の行・列はない)

## 実習：剰余系の掛け算

$m = 3, 4, 5, 6, 7$  について、

演習プリントの掛け算表を埋めてみよう

$m$  の値による様子の違いは？

## 剰余系の演算

mod  $m$  で考えたとき、 $a, b$  に対して、

$a + x \equiv b \pmod{m}$  となる  $x$  は  
必ず丁度 1 つ見付かる

→ mod  $m$  で引き算が出来る  
mod  $m$  の世界で “ $x = b - a$ ”

しかし、

$ax \equiv b \pmod{m}$  となる  $x$  は  
( $a \not\equiv 0 \pmod{m}$  でも) 見付かるとは限らない

→ mod  $m$  で割り算が出来るとは限らない

## 剰余系の演算

mod  $m$  で考えたとき、 $a, b$  に対して、

$a + x \equiv b \pmod{m}$  となる  $x$  は  
必ず丁度 1 つ見付かる

→ mod  $m$  で引き算が出来る  
mod  $m$  の世界で “ $x = b - a$ ”

しかし、

$ax \equiv b \pmod{m}$  となる  $x$  は  
( $a \not\equiv 0 \pmod{m}$ ) でも) 見付かるとは限らない

→ mod  $m$  で割り算が出来るとは限らない

## 剰余系の演算

$\text{mod } m$  で  $a$  による割り算ができるためには、  
 $(a, m) = 1$  ( $a$  が  $m$  と互いに素 (coprime) )  
であることが必要だった

$$(a, m) = 1$$

$$\longrightarrow \exists z \in \mathbb{Z} : az \equiv 1 \pmod{m}$$

( $z$  :  $\text{mod } m$  での  $a$  の “逆数” )

$\longrightarrow a$  で割るには  $z$  を掛ければよい

このとき、 $ax \equiv b \pmod{m}$  となる  $x$  が  
必ず丁度 1 つ見付かる

$$x \equiv bz \pmod{m}$$



## 剰余系の演算

$\text{mod } m$  で  $a$  による割り算ができるためには、  
 $(a, m) = 1$  ( $a$  が  $m$  と互いに素 (coprime) )  
であることが必要だった

$$(a, m) = 1$$

$$\longrightarrow \exists z \in \mathbb{Z} : az \equiv 1 \pmod{m}$$

( $z$  :  $\text{mod } m$  での  $a$  の “逆数” )

$\longrightarrow a$  で割るには  $z$  を掛ければよい

このとき、 $ax \equiv b \pmod{m}$  となる  $x$  が  
必ず丁度 1 つ見付かる

$$x \equiv bz \pmod{m}$$

## 素数を法とする剰余系の演算

一般の  $m$  では

$\text{mod } m$  で割り算が出来るとは限らないが、

法  $m$  が素数  $p$  であるときは、

$a \not\equiv 0 \pmod{p}$  であれば、 $(a, p) = 1$  なので、

$ax \equiv b \pmod{p}$  となる  $x$  は

必ず丁度 1 つ見付かる

→  $\text{mod } p$  で (0 以外での) 割り算も出来る  
 $\text{mod } p$  の世界で “ $x = b/a$ ”

## 素数を法とする剰余系の演算

一般の  $m$  では

$\text{mod } m$  で割り算が出来るとは限らないが、

法  $m$  が素数  $p$  であるときは、

$a \not\equiv 0 \pmod{p}$  であれば、 $(a, p) = 1$  なので、

$ax \equiv b \pmod{p}$  となる  $x$  は

必ず丁度 1 つ見付かる

→  $\text{mod } p$  で (0 以外での) 割り算も出来る  
 $\text{mod } p$  の世界で “ $x = b/a$ ”

## 実習：素数を法とした割り算

法  $p = 7$  に関する演算について、

(a)  $4x = 5$  となる  $x$  を表から探そう。

(この  $x$  のことを  $5/4$  と定める。)

(b)  $4z = 1$  となる  $z$  を表から探そう。

(この  $z$  のことを  $1/4$  と定める。)

法 7 に関する 4 の“逆数”  $\dots 4^{-1}$  とも表わす。

(c) 4 での割り算を、その逆数  $4^{-1}$  を掛けることで計算して、結果を比較しよう。

## 有限体

**体 (field)** : 四則演算 (加減乗除) が出来る集合

例 : 有理数体  $\mathbb{Q}$  ・ 実数体  $\mathbb{R}$  ・ 複素数体  $\mathbb{C}$

素数  $p$  に対して、

$p$  で割った余りの集合  $\xleftrightarrow{1:1} \{0, 1, \dots, p-1\}$

この中で (0 で割る以外の) 四則演算が出来る

… 有限体 (**finite field**) ・  $p$  元体  $\mathbb{F}_p, \mathbb{Z}/p\mathbb{Z}$

## 有限体

**体 (field)** : 四則演算 (加減乗除) が出来る集合

例 : 有理数体  $\mathbb{Q}$  ・ 実数体  $\mathbb{R}$  ・ 複素数体  $\mathbb{C}$

素数  $p$  に対して、

$p$  で割った余りの集合  $\xleftrightarrow{1:1} \{0, 1, \dots, p-1\}$

この中で (0 で割る以外の) 四則演算が出来る

… 有限体 (finite field) ・  $p$  元体  $\mathbb{F}_p, \mathbb{Z}/p\mathbb{Z}$

## 有限体

体 (field) : 四則演算 (加減乗除) が出来る集合

例 : 有理数体  $\mathbb{Q}$  ・ 実数体  $\mathbb{R}$  ・ 複素数体  $\mathbb{C}$

素数  $p$  に対して、

$p$  で割った余りの集合  $\xleftrightarrow{1:1} \{0, 1, \dots, p-1\}$

この中で (0 で割る以外の) 四則演算が出来る

… **有限体 (finite field)** ・  $p$  元体  $\mathbb{F}_p, \mathbb{Z}/p\mathbb{Z}$

## 有限体

体 (field) : 四則演算 (加減乗除) が出来る集合

→ 四則演算しか使わない計算なら、  
有限体  $\mathbb{F}_p$  上でも  
実数や複素数と同様に行なえる

例 : 連立 1 次方程式を解く

大小関係・極限・収束などはない



物理技術の利用においては、

微分積分（解析学）がその基礎となったが、

有限・離散な世界である計算機上の  
情報・数理技術の利用においては、

抽象代数学がその基礎となっている

- 基礎理学はすぐには役に立たない
- けれども不思議といつか役に立つ
- それがいつかは判らない

→ “良いもの” を追い求めるのが大切

物理技術の利用においては、

微分積分（解析学）がその基礎となったが、

有限・離散な世界である計算機上の  
情報・数理技術の利用においては、

抽象代数学がその基礎となっている

- 基礎理学はすぐには役に立たない
- けれども不思議といつか役に立つ
- それがいつかは判らない

→ “良いもの” を追い求めるのが大切

物理技術の利用においては、

微分積分（解析学）がその基礎となったが、

有限・離散な世界である計算機上の  
情報・数理技術の利用においては、

抽象代数学がその基礎となっている

- 基礎理学はすぐには役に立たない
- けれども不思議といつか役に立つ
- それがいつかは判らない

→ “良いもの” を追い求めるのが大切

## 数理技術としての応用例 1

有限体の算術を利用した、  
ちょっと不思議な応用例を紹介しよう

# 秘密分散

( 秘密情報の安全な管理の一方法 )

## 秘密分散

盗賊の親分が隠し財宝の在処を子分達に伝える  
(会社の社長が超重要機密を重役達に伝える)

伝える相手は3人

それぞれに異なる手掛かりを教える

但し、

- どの1人も自分だけでは何も判らない
- どの2人でも教え合えば判る

ようにするにはどうしたら良いか？

## 秘密分散

アナログ技術で実現するのは中々難しそうだ

→ デジタル技術・数理技術の利用

→ 秘密情報を数値化・符号化して処理  
(有限・離散の世界の積極的活用)

## 秘密分散

駄目な例 1：秘密情報を 3 桁の数字列として  
各人に 1 桁ずつ教える

- 2 人がつるんでも判らない
- 各人は何も知らないよりも情報がある

駄目な例 2：秘密情報を 3 桁の数字列として  
各人に 2 桁ずつ教える

- 2 人がつるめば判るが、
- 各人は何も知らないよりも情報がある

## 秘密分散

駄目な例 1：秘密情報を 3 桁の数字列として  
各人に 1 桁ずつ教える

- 2 人がつるんでも判らない
- 各人は何も知らないよりも情報がある

駄目な例 2：秘密情報を 3 桁の数字列として  
各人に 2 桁ずつ教える

- 2 人がつるめば判るが、
- 各人は何も知らないよりも情報がある



## 秘密分散

- 素数  $p$  を固定（これは公開）
- 秘密情報は有限体  $\mathbb{F}_p$  の元  $b$  とする
- ランダムに  $\mathbb{F}_p$  の元  $a$  を選ぶ（これも秘密）
- $\mathbb{F}_p$  上の“直線”  $y = ax + b$  を考える
- 各子分に対して
  - ★ 異なる  $\mathbb{F}_p$  の元  $x_i (\neq 0)$  を選び  
 $y_i = ax_i + b$  を計算する
  - ★ “直線上の点”  $(x_i, y_i)$  を教える

## 秘密分散

- 素数  $p$  を固定（これは公開）
- 秘密情報は有限体  $\mathbb{F}_p$  の元  $b$  とする
- ランダムに  $\mathbb{F}_p$  の元  $a$  を選ぶ（これも秘密）
- $\mathbb{F}_p$  上の“直線”  $y = ax + b$  を考える
- 各子分に対して
  - ★ 異なる  $\mathbb{F}_p$  の元  $x_i (\neq 0)$  を選び  
 $y_i = ax_i + b$  を計算する
  - ★ “直線上の点”  $(x_i, y_i)$  を教える

## 秘密分散

- 素数  $p$  を固定（これは公開）
- 秘密情報は有限体  $\mathbb{F}_p$  の元  $b$  とする
- ランダムに  $\mathbb{F}_p$  の元  $a$  を選ぶ（これも秘密）
- $\mathbb{F}_p$  上の“直線”  $y = ax + b$  を考える
- 各子分に対して
  - ★ 異なる  $\mathbb{F}_p$  の元  $x_i (\neq 0)$  を選び  
 $y_i = ax_i + b$  を計算する
  - ★ “直線上の点”  $(x_i, y_i)$  を教える

## 秘密分散

2人つるむと判る理由：

2点を通る“直線”  $y = ax + b$  は唯一に定まる

2点  $(x_i, y_i), (x_j, y_j)$  を通る直線は

$$a = \frac{y_i - y_j}{x_i - x_j}, \quad b = y_i - \frac{y_i - y_j}{x_i - x_j} x_i$$

→ 秘密情報  $b$  が判明した

## 秘密分散

1 人では判らない理由：

2 点を通る“直線”  $y = ax + b$  は必ず存在する

2 点  $(x_i, y_i), (0, b)$  を通る直線の傾きは

$$a = \frac{y_i - b}{x_i}$$

どの値  $b$  も同様に可能性がある

→ 何も知らないのと同じ

## 実習：秘密分散

みなさんに配った“秘密情報の一部”（鍵）

$$(x, y)$$

1 次式  $y \equiv ax + b \pmod{7}$  で  
秘密情報  $b$  を分散して伝えたもの

近くの人の鍵を見せてもらって  
秘密情報  $b$  を復元しよう  
（鍵が同じ値だったら他の近くの人に）

## 実習：秘密分散

- 法  $p = 7$  に関する計算で、秘密情報を復元しよう
- 引き算  $b - a$  はどうするの？
  - $a + x = b$  となる  $x$  が  $x = b - a$
  - $b - a < 0$  なら  $p$  を足せば良い
- 割り算  $\frac{b}{a}$  はどうするの？
  - $ax = b$  となる  $x$  が  $x = \frac{b}{a}$
  - 拡張互除法で計算できるが、  
今は表から探そう

## 「割り算」って何さ？— 定義に立ち戻ること

有限体での  $\frac{b}{a}$  とは何か？

「割り算」とは何だったか？

$\frac{b}{a}$  とは、 $ax = b$  となる（ただ一つの） $x$  のこと

定義に立ち戻る（定義から出発する）ことで、  
何であるかがはっきりする



## 「割り算」って何さ？— 定義に立ち戻ること

有限体での  $\frac{b}{a}$  とは何か？

「割り算」とは何だったか？

$\frac{b}{a}$  とは、 $ax = b$  となる（ただ一つの） $x$  のこと

定義に立ち戻る（定義から出発する）ことで、  
何であるかがはっきりする

## 「割り算」って何さ？— 定義に立ち戻ること

有限体での  $\frac{b}{a}$  とは何か？

「割り算」とは何だったか？

$\frac{b}{a}$  とは、 $ax = b$  となる（ただ一つの） $x$  のこと

定義に立ち戻る（定義から出発する）ことで、  
何であるかがはっきりする

## 「割り算」って何さ？— 定義に立ち戻ること

有限体での  $\frac{b}{a}$  とは何か？

「割り算」とは何だったか？

$\frac{b}{a}$  とは、 $ax = b$  となる（ただ一つの） $x$  のこと

定義に立ち戻る（定義から出発する）ことで、  
何であるかがはっきりする

## 秘密分散

今は 1 次式（“直線”  $y = ax + b$ ）を使ったので、  
2 人が見せ合えば判ったが、

3 人の協力で判るようにするには、  
2 次式（“放物線”  $y = ax^2 + bx + c$ ）を使えば良い  
一般に、

k 人の協力で判るようにするには、  
(k - 1) 次式を使って仕組みを設計すればよい  
(“n 人中 k 人”で出来る)

## 秘密分散

今は 1 次式（“直線”  $y = ax + b$ ）を使ったので、  
2 人が見せ合えば判ったが、

3 人の協力で判るようにするには、  
2 次式（“放物線”  $y = ax^2 + bx + c$ ）を使えば良い  
一般に、

k 人の協力で判るようにするには、  
(k - 1) 次式を使って仕組みを設計すればよい  
(“n 人中 k 人”で出来る)

## 秘密分散

- 秘密を分散する人数は余り関係ない  
→ 人数より大きな素数  $p$  を用いれば良い
- あてずっぽうでも確率  $\frac{1}{p}$  で当たってしまう  
→ 実際には大きな素数  $p$  を使う  
(100桁とか200桁とか)
- 割り算の計算を効率良く行なう必要がある  
→ Euclid の拡張互除法を用いる

## 秘密分散

- 秘密を分散する人数は余り関係ない  
→ 人数より大きな素数  $p$  を用いれば良い
- あてずっぽうでも確率  $\frac{1}{p}$  で当たってしまう  
→ 実際には大きな素数  $p$  を使う  
(100桁とか200桁とか)
- 割り算の計算を効率良く行なう必要がある  
→ Euclid の拡張互除法を用いる

## 秘密分散

- 秘密を分散する人数は余り関係ない  
→ 人数より大きな素数  $p$  を用いれば良い
- あてずっぽうでも確率  $\frac{1}{p}$  で当たってしまう  
→ 実際には大きな素数  $p$  を使う  
(100桁とか200桁とか)
- 割り算の計算を効率良く行なう必要がある  
→ Euclidの拡張互除法を用いる



## 秘密分散

- 秘密を分散する人数は余り関係ない  
→ 人数より大きな素数  $p$  を用いれば良い
- あてずっぽうでも確率  $\frac{1}{p}$  で当たってしまう  
→ 実際には大きな素数  $p$  を使う  
(100桁とか200桁とか)
- 割り算の計算を効率良く行なう必要がある  
→ Euclidの拡張互除法を用いる

## 秘密分散

- 秘密を分散する人数は余り関係ない  
→ 人数より大きな素数  $p$  を用いれば良い
- あてずっぽうでも確率  $\frac{1}{p}$  で当たってしまう  
→ 実際には大きな素数  $p$  を使う  
(100桁とか200桁とか)
- 割り算の計算を効率良く行なう必要がある  
→ **Euclidの拡張互除法**を用いる